理容師さんを悩ませる髪のあれこれ

札幌市医師会
新札幌パウロ病院
高階（たかしな）　俊光（としみつ）

私の髪についての数々のエピソードを書かせていただきます。

私は身だしなみには無頓着です。頭も染めるほど髪もありません。老いというものだから仕方がないと受け入れ自然体でいます。しかし余りにも酷いので、女房から「人は外見が９割なので身だしなみは大切だよ」とよく注意されます。確かに髪を染めるだけでも男性も女性も後期高齢者の人でも実年齢より20歳くらい若く見えます。そんなんで私は何時も特に女性の年齢に騙され続けられています。仲の良い同僚の男性も髪を染めていて、「染める髪があるから染めるんだよ」と私の前でニヤリとします。

万年青年を自負する私ですが、50代に入ってからどういうわけか急に老けて見られるようになりました。

57歳の時に当院のスタッフ５、６人で名古屋の学会に行った時のことです。電車の中で子供連れのご夫婦の奥さんから初めて席をごく自然に譲られました。誰の事かとかなり迷いましたが、お礼を言って座らせていただきました。まるで注文していない料理が運ばれてきたような戸惑いでした。この時はまだ髪もあり白髪でもありませんでした。65歳の時、深川の音羽にタケノコ採りの帰りにいつも行く協和温泉で65歳以上は安くなるというので免許証を出そうとしたところ何も言わずにフリーパスでした。66歳の時、外来で年齢の話になり72歳の女性患者さんに「６歳の年齢の差がありますね」と言ったところ、「そうですか、先生は78歳ですか」と言われてしまいました。67歳の時、北海道の鉄道の全線完乗・駅舎完訪の旅で仁山駅の温泉では一瞥しただけで「お宅は安くなるよ」とぶっきらぼうに番台のおばさんから言われました。隣で後輩が笑いをこらえていました。69歳の時、外来で若い女性に年齢を聞かれて「100歳ですよ」と言うと、「うそでしょ」と返され、「実は90歳ですよ」と答えると「随分と若く見えますね」と感心していました。74歳の時、外来で90歳女性患者さんに「100歳です」と言うと、「そうですか、恐れ入ります」と納得し、また80歳の男性は「すごいですね」と感心されました。75歳の時、回診で後期高齢者の入院女性に年齢を聞かれ「100歳ですよ」と言うと、「100何歳ですか」と真顔で言われ、全く予期せぬ質問に言葉を失い病室を出てからガックリしたものです。

私の頭は今ではもう髪がポヤポヤとしか生えていません。同期会に出席すると、髪の色はともかくとして皆ふさふさしていて髪がないのは私だけでした。

夏休みに遊びに来た孫から「じいじってさ、どうして昨日も今日も少ない髪の毛、立っているの？」、「髪の毛、何個あるの？」と聞かれました。どう答えようかと思案していると、そばにいた息子が「それなら１本ずつ抜いて数えようか」と言っているのが聞こえ、さらに「おじいちゃんはつむじないもんね、あったかなぁ」と女房の声が聞こえてきました。また息子に「そろそろ床屋に行こうかな」と言うと、「へェー」と驚かされ、「お父さんだって毛があるから伸びるんだよ」と女房がフォローしてくれました。そして真顔で「髪が少なくてすぐに終わるのに料金同じなの？」と聞かれ、「かかる手間、時間は同じだよ」と答えました。

しかしながら私は自分の頭の形にはとても自信があります。年齢とともに頭頂部、前頭部の髪がなくなり、後頭部、側頭部は白髪だらけで、自慢の頭の形がますます際立ってきています。ところがそうなって良いことばかりではありません。先日床屋に行ってこんなことがありました。

私は頭の髪を一応分けています。床屋で理容師さんが私の頭頂部から前頭部にかけてクシで梳（す）いてくれていたものですから、私は謙虚に「できれば分けてください」と言うと、少々戸惑った理容師さんが「右から分けた方がいいですか、左にしますか」と言われました。「･･･」、私にしたら初めてのことで訳が分からなく、今度は控えめに「なるべく左でお願いします」と言いました。次に行った時にも続けて別な理容師さんからも同じことを言われた時には「頭の髪に聞いてくれ」と言おうとしたのですが、そこをグッと堪えました。そして「今日は左でお願いします」と言いました。

つむじのないハゲ頭なので理容師さんは右か左か困ったなのでしょう。車を運転して右に行くか左に行くかでは大違いです。理容師さんも迷いに迷って勇気を出しておっしゃったんだと思います。私のハゲ頭はご高齢の方ばかりでなく理容師さんも困惑させるようです。この話を女房にしたらプッと吹き出し笑ってくれました。ここまで読んで下さった読者の皆さんもどうぞ笑ってください。こんなこと２度も続けてありましたから、さらに３回続くのか次に行くのが少し楽しみになってきました。２度あることは３度あるのか、それとも３度目の正直か･･･。

後期高齢者の仲間入りをしてから若い時の大酒のみが祟って、自業自得ですが、サルコペニアを呈しています。通勤の地下鉄の優先席に座るような時には小生の頭が武器となり帽子を脱いだり被ったりしています。女房は「お父さんの様子を見たら優先席に座っても誰も文句言わないね」と言っています。髪のことでは理容師さんを悩ませてはいますが･･･。